

ランチョンセミナー1

Luncheon Seminar 1

日時 2025年4月26日(土) 12:40~13:40

会場 第1会場(熊本市国際交流会館 6Fホール)
〒860-0806 熊本市中央区花畑町4-18

どう考えたらいいのか? アラーム疲労対策

~医療安全の立場になって見えてきたもの~

座長 垣花 学 先生
琉球大学病院 麻酔科 教授

演者 谷口 雄司 先生
鳥取大学医学部附属病院 医療安全管理部 教授

整理券配布はございません

直接会場までお越しください。
お弁当は順番に配布いたします。
※数に限りがございます。ご了承ください。

ランチョンセミナー1

どう考えたらいいのか?アラーム疲労対策

～医療安全の立場になって見えてきたもの～

谷口 雄司

鳥取大学医学部附属病院 医療安全管理部 教授

生体情報モニター(以下モニター)におけるアラーム疲労は、20年以上前から問題視されているが、多くの施設でその対応に難渋していると思われる。当院においてもアラーム疲労が問題となったが、即効性のある根本的解決策を見いだすことができなかった。そこで、姑息的対策であることをわかった上で、3年前にインターコミュニケーションシステムを試験的に導入した。導入した病棟の看護師からは、他の看護師に対応してもらえる事で業務の効率化をはかることができている、センサーやモニターが鳴った時の応援依頼に対してスムーズな対応が可能で、導入した効果を実感しているなど、概ね良好な評価を受けている。現在、「モニター・アラーム対策ワーキンググループ」を立ち上げて、モニターの装着基準・離脱基準を策定するなど、少しずつではあるが根本的対策に着手している。これらの対策を通じて、アラーム疲労には以下の課題があると思うようになった。

当院では、病棟によってはモニターアラームとほぼ同数の離床センサーやベッドセンサーなどのセンサー類が鳴っている。したがって、1)アラーム疲労ではなくナースコール疲労という視点で対策を講じる必要性があること、2)アラーム疲労(あるいはナースコール疲労)を測定する確立された簡便な方法がないこと、3)対応可能なアラーム(あるいはナースコール)の頻度についての基準がないこと、4)モニターの装着基準や離脱基準、アラーム基準の見直しをおこなう場合、医師・看護師には、アラームが鳴らなかった事で患者の急変に気づかなかった際の責任の所在に対する不安があること、そして何より5)アラーム疲労を来している医療従事者の多くは看護師であり、医師は少ないと思われることである。

チーム医療が叫ばれる今こそ、特に医師は、大切なチームメンバーである看護師のアラーム疲労を自分たちの問題として捉えるべきだと考えている。